

# 1 九州に於ける石器時代人民

理学士 佐藤 傳藏

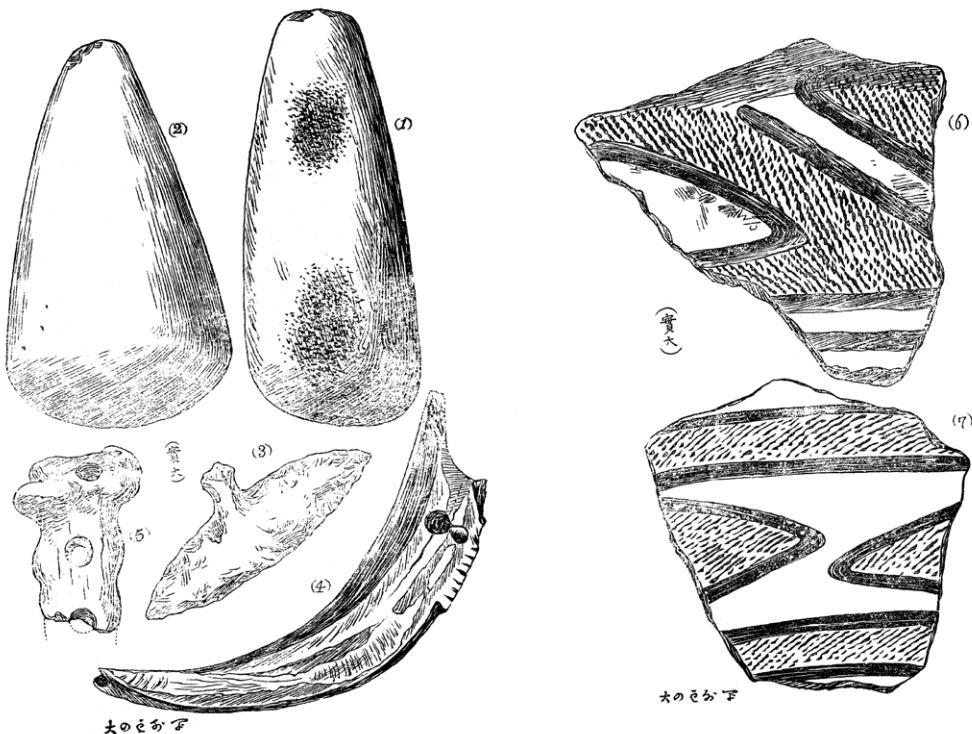
九州に石器土器を遺したる人民は、関東奥羽地方に石器土器を遺したる人民と同しきものなるか、抑亦相異なる者なる乎、是れ日本の先史人類に関する極めて重要な問題なり。薩南諸島に於ては夥多の石器を出すが、関東及奥羽地方より多く出す處の土器は、全く之を出さずと言ふも可なるべし、然らば関東及奥羽地方に於て、石器と共に土器を遺したる處のものは、九州の薩南諸島に於て石器のみを遺したるものとは相異なるものなる乎、関東奥羽地方に於て石器及土器を共に製造使用したる者と、薩南諸島に於て主として石器を製造使用したる者とは、同一の人種なるか、之れ吾人の知らんと欲する所なり。

我日本の各地方より出す石器時代の遺物には、自ら多少の地方的分布の其間に存するものゝ如し、一般に石器は北は北海道より、南は台湾に至る迄、諸地方に於て之を発見するも、土器は此の如く普く行き渡れりと云ふを得ず、奥羽関東地方よりは石器と共に多くの土器を出すも、中国に至れば土器は甚た乏し、薩南諸島に至れば殆んど全く土器を出さずと云て不可なかるべし、石器も其間に地方的分布ありて、北海道よりは石鎌の立派なるもの、石斧の立派なるもの、石槍の立派なるものを出すが、彼の石棒なるものに至ては稀なり、之に反し北海道に極めて接近せる奥羽地方は、石棒、石劍の精巧なるものを多く出す、又た石匙（俗に天狗の飯匕（めしかい）と称す）と称する者は、奥羽地方には沢山見出さるゝも関東地方に於ては比較的少なく、九州に至りては割合に多く出すか如し、此の如く我国諸地方より出す石器時代の遺物には、多少の地理的分布あるが、是れ果して偶然の起り事か、抑も亦其間に一種の意味の存するものにや。

九州と奥羽若くは九州と関東と云へは、既に地理的距離に於て甚しく相距れるが、此等諸地方に於て石器土器を遺したる人民の棲息せる時代に於ける事は第二の問題として、其人種は果して同一なりや、将た亦相異なれりや、是れ余の述べんと欲する所なり。

從來石器時代の遺跡に關し、九州の事情は甚た不明の中に葬られ居りたり、余は昨夏仲仙道、東海道、山陽道等を経て九州に至り、肥後の二三の石器時代遺跡を踏査するの機を得たり、素とより調へ尽したりといふを得ざるも、採集したる品物に就て一二の説明をなし、此等の遺物を製造使用したる人民に就き、聊か意見を述べんとす。

石匙は奥羽地方に甚た多く、何處の遺跡に行くも直ちに見出さるゝが、常陸武藏辺の遺跡に行くも容易に之を得ること能はず、然れども九州に行けば比較的多しとす、一般に九州の貝塚は貝殻の多量なる割合に、其内に含有せらるゝ遺物は甚た少なし、近比発見せられたる彼の石器時代遺物発見地名表にも載り居らざる遺跡は、肥後の国宇土郡轟村に在り、轟村は熊本市の南三里余の所に在り、清水の湧出する所なれば、熊本市街の人士は納涼に行くこと甚た多し、其側に一大塚あり、現今の切斷面を見るに、上部は之を覆ふの土は殆んど無く、貝殻を露出し、其厚さ殆ど六尺に達す、貝の種類は、かき、あかゞひ、はまぐり等にして関東地方の貝塚と別段異なることなし、其介殻の多量なる昨年より今日に至るまで、尚石灰を取る為めに貝を焼きつゝありて、此後も尚此石灰業を永続するの見込ある程なり、此の如く貝殻の分量は多量なるも、其割合には土器石器の分量少なく、彼の椎塚（常陸）より介殻と共に沢山の遺物を出すか如きことなし余は暫時此貝塚を穿鑿したる後、漸くにして土器の破片若干を採集したるが、石器も亦同様に少なし、然れども其種類及び土器の模様に至ては甚た面白きものあり、（第六図）石器としては石斧石鎌の外に関東地方に少なき石匙を出すなり、又合志郡黒石村の遺跡よりも見事なる石匙を出せり（第三図）併し其形ち奥羽地方の者と少しく異なれり、奥羽には扇形の者多きも、此轟村及黒石村より出せるものは多少横に長し、然とも決して之を製造使用したる人種の異なる証となす如き甚しき差異にあらず。又土器の模様に於ても関東地方より出



者と、全く同一の者あり、第六図は轟村の貝塚より余か採集せるもの、之を第七図に示す常陸国椎塚より出たるものと相対照せよ、吾人は其間に些少の差をも見出す能はさるなり、されば関東地方に石器土器を残したる人民と、九州肥後に石器土器を遺したる所の人民とは、其趣味好惡を同ふせりしと云ふを得べく、彼等は全く同一人種なれりと云ふを得べし、製作に至りても、人稍もすれば其甚しく粗雑なりと説く者あり、然れども間には中々に精巧なるものあり、決して欧羅巴の所謂新石器時代の者にも劣らざる者あり、第一図及び第二図に示す所の石斧は、合志郡御満田村より出せるもの、共に其製作の巧妙なる、奥羽地方より出せる者と云ふも決して差支なき位なり、されば若し単に品物の精巧なるを以て、之を製造使用したる所の人民は発達したものと云ふを得ば、九州に於ける石器時代人民は、誠に好く発達したものと云はさる可からず、肥後八代郡大野村の遺跡よりは、石斧の両頭は刃のあるものを出し、恰も北海道より出たる者と区別する能はさる程なり、土器は薩南諸島よりは之を出さず、中国は甚た乏しく、関東に至りて頗る多く奥羽に至りて最も精巧のものあり、今採集せる二三のものを見るに、常陸或は三崎（相州）より出するものと、殆んど全く同しきものあり、故に肥後に石器土器を遺せし人民は、関東及奥羽地方に石器土器を遺せし人民と同一なりといふを得へし、此外肥後よりは骨器の精巧なるものを出せり、（第五図）穴の穿ち方磨き方の如き仲々に巧みなり、又猪の牙に彫刻を施したるもの大野村より出せり、（第四図）尚九州に就て知らんと欲する処は、土偶の有無（出たりといふことを聞くのみ）石棒有無の如何にあり（今後発見せらるゝやも知れず）要するに九州石器時代遺跡は性質は、関東奥羽地方の遺跡と、大体に於て変らぬこと、及び其の石器土器を製造使用したる所の人民は、要するに同一人種に属するものなることを、断言せんと欲するなり。